

清は平家滅亡後、勢盡き鎌倉に拘へられ、八田知家の家に有りしが自絶食して死せり。されば日向へ流されしと云ふ事も、盲人となりしと云ふ事も、琵琶法師となりしと云ふ事も、皆虚構である（以上事實証據有れども、長ければ畧す）また盲目となりし事及び大佛供養に魚の鱗を眼に餵めて、頼朝を刺さんとせし事は、上總五郎忠光にて、忠光は景清が兄なるが故に、それやこれやを取合せ、大佛供養も盲景清も出来しものならん歟○尾州熱田に景清の小社あり、目を病む者これに祈りて験ありとぞ。妙なる哉だ○所は日向○時は春○登場人物は端役を除き五名○年齢は景清、五十位。人丸、十四五才。左治、五十位。天野四郎、三十五六。土屋郡内、四十五六。（以下略す）

浄曲 語り物 の 譯 乾之卷畢

浄曲 語り物 の 譯 坤之卷

鶴澤名門二口演

門人 竹本其太夫筆授
門人 鶴澤秀作校訂

●傾城戀飛脚 新口村の段に就いて

忠兵衛は家號を龜屋と云うて、大阪淡路町に住して飛脚屋を渡世とす、或時用事ありて北の新地（新町とも云ふ）を通行せし際、誤つて鼻紙囊を取り落せしに、それを通りかゝりし同地の藝者、榎屋の梅川が拾ひ取り、直に忠兵衛を呼び戻し手渡しせしが、抑々二人の馴染の發端にて。それより後忠兵衛は、獨身なれとも日頃の品行方正なりしには似もやらず、梅川の色香に迷ひ、溺るゝともなく溺れ、遊ぶ

程に通ふ程に、型の如く「廓の金には詰るか慣」と、所々に不義理の借金を爲し、のみか、竟に大名の爲替金貳百五十両を費消す。依託金費消は素より有罪。この事程無く露顯に及び、忠兵衛は入牢し、寶永七年十二月五日牢死す。時に三十五歳なり。親族の者死骸を請ひ受け、之れを東高津北橋寺町傳光寺に葬り、法名を頓覺利達居士と號す、墓は同寺門内南側、本堂の北手に今も在り。○梅川は其の時二十四歳なりしが、此の評判の高かりと爲、此所にては勤め悪く、京の祇園新地と、同じく西陣とへ二度までも住替へせしもの、さて不思議にも、行先々々にて馴染む客は皆飛脚屋にて、それがいづれも不首尾の事のみ生ずるもの故、竟に發心して、年明け後は古郷なる近江國の矢走へ歸り、同所に梅川庵と云ふ小庵を建立して、自は

尼となり一生を行ひすまじ、六十六才にて同庵にて往生の素懷を遂げたりと云ふ。○今は矢走に遺跡なし、梅川の墓は忠兵衛の墓と共に前記の傳光寺に在りて、法名は梅室妙覺信女蓋此の墓は、先年仁左衛門になりし我童が現今の住職と協議の上建立せしものなりと聞く



○八左衛門は色敵で無く、忠兵衛の叔父で、正直なる人にして忠兵衛の放蕩を懲さんとて、強意見せし事ありしと。○新口村が忠兵衛の古郷と云ふ事書見なら。○新小説十年九卷に、關根默庵氏の梅川考あり見るべし。○作は安永二年十二月。○作者は菅傳助、若竹笛躬の二名されど、これは大近松の冥途飛脚(正徳元年三月)と、紀海音の傾城二度

笠(正徳三年十月)を添刪せしに過ぎずと云ふ○關西線の三輪驛の停車場の前の茶店に、「梅川忠兵衛の古跡、三輪の茶屋」と云ふ看板が出て居る、ユイツ石部の宿屋と、大谷の吃又の舊宅とよい角力た○所は大和○時は冬○登場人物は端役を除き四名○年齢は忠兵衛、二十七八○梅川、十九か廿○孫右衛門、六十位○忠三の女房、三十位○(以下略す)

●傾城阿波の鳴戸 順禮歌の段に就いて

十郎兵衛は阿波浪人、浪人後は大阪の玉造邊に仮住居して居たるが元來奸佞邪智なるに、浪人しての後は家計の道なきまゝに、詐欺強借夜盜追剝を業として多くの人を惱ませし由。或時順禮の子の金持ちて居るを知り、欺いて家に連れ歸り、深夜に及び之れを縊り殺し竊に其の死骸を、猪飼野の畑中へ埋め隠した。然るにこの事竟に露

顯に及び、召捕られ嚴敷き吟味の上、遂に重罪に處せられた。と云ふのが事實で。國次の刀の紛失も、巡禮の娘も親子でもなんでもないのである。が、是を狂言に仕組たのは、明和五年の六月○作者は近松半二等五名○全部は十段續きで。趣向は若殿衛門之助の放埒。小野田郡兵衛と云ふ國崩の悪人が、國次の刀を盗んで其の罪を同家老の櫻井主膳に負はせ、櫻井を自滅させ、國家を押領せやうとする。又主膳の歩仲間十郎兵衛(銀十郎の名未考)は、喧嘩の上郡兵衛の家來に疵負せしにより勘當の身となつて居る。其の十郎兵衛が勘當を詫に來るを、勘當は許さずして刀の詮議を依頼する、この刀の詮議の爲悪事と知りつゝ、盜賊を働くと云ふ仕組み。ソレに夕霧伊左衛門をかんだ趣向。ことにこの八段目に巡禮の御詠歌を嵌込んだはよい趣

向サ。三略卷の道行も、詠歌を臺に書きしもので、其の他御詠歌を
 嵌めたのは「岸姫」「百度平」「壺坂」「濱松」等にも有るが、この八段目
 の御詠歌は、御詠歌中の御詠歌で、外題の小書にも巡禮歌の段と有
 るのでも知れる。○登場人物は端役を除き四名。○所は大阪。○時は秋。○
 年齢は十郎兵衛、三十七八。○お弓、三十前後。○武太六、四十計り。○おつる、九
 ツ。○(以下略す)

●傾城名筆鑑 將監住居の段に就いて

名題の角書に「敦賀の遠山」「花落の葛城」と有るは、將監の娘のみつ
 が越前の敦賀で、遠山。又平の娘が、島原で葛城と云うて、繪書の
 娘か二人共に女郎なつて居る、ソレで「傾城名筆鑑」なんだ詰らない
 名題だ。詰らぬと云へば名題はかりで無い、全部の趣向も素より架

空の事だが奇怪千萬、支離滅裂。イヤハヤ、どからちやからで御話に
 ならぬ(梗概畧す)愚作た。○全部は十二段物で、十二段目の反魂香の段
 は、幽霊の道行風の物で是れが大詰。○この場は四段目の切である。○
 吃の又平支考か本朝文鑑に「浮世又平は大津講の元祖なり」とあれど
 も、外に依るべき事蹟なければ、これは岩佐又兵衛の事ならんか。岩
 佐又兵衛の傳は、古書備考。扶桑畫人傳。帝國人名辭典等に出で居
 る(事長ければ略す)が、是れとても古來人物の有無に就いては疑が有る
 ソレは兎も角、大津繪は有つたもの(委敷は社會事彙に載すれども、事長け
 れはこれも略す)其の畫工に吃の者が有つたかも知れぬ、ソレが又平か
 否かは尙知れぬ。○可笑は、この事蹟の曖昧なる、吃の又平の舊宅な
 りとて、目下盛に廣告して居る料理屋か、東海道大谷の停車場の近

傍に有る。いつもながら狂言の力の偉大なるには感心する。○大津繪を淨瑠璃に仕組せしは、伊勢平氏年々鑑と、平假名盛衰記と兜軍記で、又この外にも有るであらう。○傾城反魂香(天近松)は、同意同趣向の物で仕組が前後して居る位のもの。此の外に尙今様傾城反魂香(並本宗輔)と云ふ物か有る、これもこの吃又を仕組み物と聞くと未だ見ず。○作は寶曆二年三月。○作者は吉田冠子外貳名。○所は山城の山科。○時は春。○登場人物端役を除き六名。○年齢は將監、五十位。奥方、四十五六。又平、四十位。お徳、三十四五。修理之助、廿三四。歌之助、十八九。(以下略す)

●源平布引の瀧 綿操馬の段に就いて



この布引の瀧は、源平盛衰記の一節、清盛專横帝を鳥羽に幽閉せりと云ふ件と、帶刀先生義賢の事、木曾義仲出生の事、多田藏人行綱の事、齋藤實盛の事に、關の小万の事を絡んだ作で、名前は有名、事實は無根。例に依つて例の如き歴史的の夢幻劇。○名題の布引の瀧は初段の「中」に難波の六郎か清盛の命に依り布引の瀧壺を採撿せしと云ふに依る。○角書の「待宵の侍従」「優美の藏人」の譯は四段目に出る人物だから四段目で云ふ事にする。○戀女房染分手綱で、出所身分の取調に困難した、關の小万は、染分手綱より五年前の寛延二年十一月の作に、此の作に整然と出て居るから面白い。併此所で小万が死んだとなると、染分手綱の方は二代目か知らん。テ面妖ナ。○全部は五段目でこの場は三段目の切。○この場は手孕村と云ふ地名から思ひ

付いた趣向で總ては無根の事なれども、舞台面にも變化があり且つ見た處も奇麗で派手で面白い。所謂これらが、舊劇の純なるものとも云ふべき歟○時は秋○所は近江の國栗本郡手孕村で、此所が小万の原籍地○作者は並木千柳と三好松洛の二名○登場人物端役を除き八名○年齢は實盛、三十五六。瀨ノ尾、五十位。葵御前、三十位。九郎助、六十位。母、五十位。太郎吉、七才。小万、廿三四。一惣太、廿八九。(以下略す)

●源平布引瀧 松波琵琶の段に就いて

これは源平盛衰記の一節清盛が専横にして帝を鳥羽へ幽閉せしと云ふを骨子に仕組みしもの○名題は初段の「中」に難波六郎が清盛の命に依り、布引の瀧壺を探檢せしと云ふに依る○この名題の角書に「待宵の侍従」「優美の藏人」とあり。これは、原作にては、茲の三人

上戸の一人の藤作が、多田藏人行綱で、行綱の妻待宵も、官女となつて此の離宮へ入り込んで居る。ソノ夫婦が段切に、例の「物かは」の歌の贈答が有るに依つて、この角書は有るのである。それがいつ頃、誰人が改作したものか知らねども、行綱は松波檢校、藤作は初段で死んだと見せたる難波六郎となつて、待宵は無くなり其の代りに小櫻と云ふ娘が出来た。人の増減は兎も角、斯う云ふ風で改作するに、直ぐこの切の作意に矛盾する、併通して無く、一段物として語ればこれでもよい○この改作、目新しき琵琶の曲に、小櫻と云ふ可憐なる少女をあしらひしは、舊作と全く目先を變た趣向で、滿更悪い作ではない○全部は五段物で、この場は四段の中○作は寛延二年十一月○作者は並木千柳と三好松洛の二名○所は山城○時は冬○

登場人物は端役を除き五名○年齢は行綱、三五六。小櫻、十三四。平次三十位。藤作、三五六。又五郎、四十位。(以下略す)

●双蝶々曲輪日記 引窓の段に就いて

この双蝶々の主人公は山崎與五郎、山崎與五郎は淀屋辰五郎の事で吾妻の事、偽金の事、權九郎の事等何れも事實に近い事なれども、この場に用の無き事なればこれを略す○濡髪長五郎は山城國八幡の寺子屋都倉某の悴なれども、幼少より我武者ものにて、親の教に順はず、竟には父の許を去り、同地の關取荒岩斧右衛門の養子となり荒岩長五郎と改め、相撲取となりしも、常に喧嘩口論を好み、平生水に浸せし紙を額に張りて喧嘩場に臨む。これ、濡紙には双物透らず、と云ふ俗説を信せし故なり。後、濡紙を濡髪として、濡髪長五

郎と名乗り大阪に出でしが、或時難波裏にて服部郷右衛門と云ふ侍と争論して切害し、古郷なれば八幡へ逃げ實家に隠れ居れりしが、程無く召捕れて所刑を受けたり、是れは享保年中の事である○放駒との喧嘩も是の頃ならんも、放駒に就いての事蹟は分らぬ○この双



蝶々の前に「昔米萬石通」(西澤一鳳作)「山崎與二兵衛壽の門松」(大近松)「難波丸 金鶏」(若竹笛躬)等の作がある、皆この一件を仕組みらのもだ○双蝶々の名題は道行の文句に「われも長われも長、二ツ合せて蝶々とまれ」と有るに依る、曲輪日記は字の通り○全部は續九場にてこの場は八段目の切○作は寛延二年の七月○作者は竹田出雲、三好松

洛、並木千柳の三名○所は山城の八幡○時は秋○登場人物六名○年齢は長五郎、廿七八。與兵衛、三十位。母、五十位。おはや、廿四五。平岡、三十三四。三原、三十五六。(以下略す)

●碁太平記白石嘶 田植の段に就いて

松平陸奥守(仙台侯)の家老、片倉小十郎の劔術の師に、田邊志摩(千石取)と云ふ者あり、享保三年中、同國白石に於いて、領内足立村の百姓四郎左衛門の爲に、路次の供先を破られたりとして無禮討にしたりける。この時四郎左衛門に二人の娘あり、姉は十一才妹は八才なりけるが、深くこの事を無念の事に思ひ、如何にもして父の仇を討んものと、仙台に赴き、陸奥守殿の劔術の師範役たる瀧本傳八郎(後土佐と改む、二千石取)の許に傳手を求めて、姉妹共に奉公に住み込み、忍

びくに六年間劔術を覚えける(中略)後、この瀧本の後援にて、仙台侯の御許を得て、仙台市白鳥明神の境内にて首尾よく敵志摩を討ち得たり云々。ソコで田植の段は、この前半の事實を種に、鏡の事を絡み、且ツ正雪、谷五郎等の事を取り合せたもの。素より狂言、事實の有無を論するに及ぶまい。○宮城野信夫の事は、吉原の段に云うて置いた。○全部は十一段物で、此の場は四段目の切。○作は天明七年八月作者は鳥亭焉馬外四名。○所は奥州。○時は初夏。○登場人物は端役を除き七名。○年齢は與茂作、五十五六。おのぶ、十二。臺七、三十二。丹助、三十五六。貫平、廿七八。七郎兵衛、六十位。正雪、三十位。(以下略す)

●碁太平記白石嘶 新吉原の段に就いて

此の姉妹は陸奥國柴田郡村田町在足立村の者にて、この敵討は享保

八年中、仙臺白鳥明神の境内にありし事實なれ共、事ながければ略す。由井正雪(宇治常説)に關係せし事及び姉が吉原に娼妓なりしこと云ふ事等は素より無根の話。正雪が誅に伏せしは慶安四年で、享保八年は約七十餘年の後のことと有る。如何に正雪がエラブツでも、死後七年も後の姉妹の敵討に助勢しさうな事はない。さればこの敵討に正雪の關係せしとせしは、この碁太平記の作者鳥亭焉馬(外四名天明七年八月の作)の趣向で。趣向といへば、正雪とこの姉妹と結び合せしのみならず、奥州の地名に因み、姉の名を宮城野、妹の名の信夫とし、且ツ現今とは違ひ、當時奥州と云へば、外國でも有る様に思うて居る人氣を利用して、たゝアや、がまア、赤腹はたれぬ、なんぞとエタイも知れぬ國訛りを應用して、うまく喝采を得たものだ。○白阪は

白川郡、坂井村は菊田郡で、近在どころの譯ではないが、ソレがソレ白坂近在坂井村サ。○静岡市(阿部川)三ノ口の彌勒寺にこの姉妹が、由井の菩提の爲に建立せしと云ふ石碑が有る(丸本の八ノ切にもこの事が一寸はのめかして有る)何人の好事にや。これ正に、富山の伏姫の碑、宇治に橋姫の碑を建てしと同寸法一笑すべき價値ありた。○慶安の出来事なれど、例の幕府を憚り殊更に南朝時代として太平記、八段目の口に碁を打つ所が有るから、碁は後に通ずるので、碁太平記、一寸この外題洒落て居る。○全部は十一段物で、この新吉原は七段目の中で、切は忠七に似た派出な懸合物で有る。○この吉原の語り本は丸本とは文章に於て大違ひで有る。(同意なれ共)出版年月は未詳なれ共、思ふに享和、文化頃の發行ならん、と思はるゝが江戸横山町二丁目伊

勢喜版と云ふ切り本が有る、是は六行本にて「東都堺町御操」「大字遊下本」と銘打つた物、これは丸本と同文章。されば現今のこの二階は、いつの頃誰れ人が刪補せしものなるや、後人の添削は多く原文に劣る物多きものなるに、これは又原文に劣らざる名文、章も手もまづくなきは、何れ知名の人の手になりしものならん、ハテ誰れ人のすさみにや○所は江戸○時は初夏○登場人物七名○年齢は宮城野、十九。信夫、十二。宮里、十八九。宮柴、廿三四。しゆり、十才位。宗六、三十七八。お政、四十位。(以下略す)

●木下蔭狹間合戦 竹中砦の段に就いて
木下藤吉郎の智謀の御蔭に依つて、桶狹間の



合戦に勝利を得たり」と云ふ意味からこの名題を据たものだ。サテ角書の「小田の結納」「齋藤の色直」とは二巻目の信長の義濃入に依りしもの、その他、足利義輝の放蕩、三好の反逆、石川五右衛門、木下藤吉等の生立、雌龍雄龍の劍、漢竹の笛、太政官の正印等を取り合せしものにて、総ての趣向は繪本太閤記のアソコヤコ、を補綴せしものなれども、支離滅裂イヤハヤ御話しにならない作意だ。殊に可笑は、此の桶狹間の合戦の相手は今川義元なるを、齋藤義龍の加納合戦に取り合せしかば、齋藤治部太夫義龍と云ふ、二人を一人とした妙な名前の大將が出来た。ソレに美濃方の軍師竹中の砦が、三河池鯉附に有るなんどは、如何に狂言綺語でも不自然不道理も甚といサ(以上壬生村と同文)○理屈は兎も角この場は駈引の仕合で長い幕た

がドンチヤン物でも目先きか變つて面白い○竹中半兵衛、前田犬千代、織田信長、齋藤義龍、木下藤吉等の傳は茲に略す知りたくは太閤記を見らるべし○犬清が千里に通せしとは織田の奥女中芳野に通せしと云ふ事實に依りしならむ○全部は初編五卷次編五卷合せて十卷物でこの場は七卷目の切である○作は寛政元年二月○作者は若竹笛躬、近松余七、並木千柳の三名○所は三河○時は初夏○登場人物は端役を除き七名○年齢は官兵衛、五十位○關路、四十二三○犬清、廿位○千里、十八九○當吉、廿二○春永、三十位○義龍、廿七八○(以下畧す)

●木下蔭狭間合戦 壬生村の段に就いて

この狭間合戦の譯は「竹中の碧」に云うて置いたから、茲には略す○五右衛門の傳は太閤記を見るがよし、外にも澤山あるは有るが○治

左衛門、小冬等は例の架空の人物○併公家に

なつて田丸を欺き大金を奪ひし事、また世尊寺中納言の衣冠を奪ひ、内裏へ忍込みし事蹟太閤記にあり○全部は初編五冊、次編五冊と分けて十卷。一の卷より二の卷の間に「此間十ヶ年年數相立」とあり、また初編の五の卷



より次編の六の卷の間に「是より六の卷迄十餘年年數相立」との斷り書が有る。これ普通の丸本の組織とは異例である○一の卷は發端にて治左衛門の物語の通りの女殺しの場で、十の卷は悪人の三好が滅びて目出たしくである○この場は九段目の切○作は寛政元年二月○作者は若竹笛躬、近松余七、並木千柳○所は山城○時は三月○登

場人物端役を除き四名○年齢は五右衛門、廿三。小冬、十三。治左衛門、五十位。當吉、廿二。(以下略す)

●國姓爺合戰 樓門の段に就いて

明の鄭芝龍が、吾が日本肥前の平戸に來り田川氏の女を娶り、成功(和藤内、國姓爺)を生ませ、後本國に歸り、成功母子を迎ふ。清人明を攻むるに及び、芝龍防戦し力盡きて降る。母田川氏は身を川に投じて死す。成功一人餘衆を擁して降らす、明の爲に屢く勳功を顯す、故に明主これに朱と云ふ姓を賜ひ、御營中軍都督(吾、近衛師團大隊長歟)となしぬ。朱は明主の姓なる故、國人成功を國姓爺と尊稱す(成功の事は鄭成功傳に最も詳けれども略す)以上事實○この國姓爺と、和唐内と名附けしは、和(日本)にも唐にも無き程な豪傑と云ふ意味で、ソレで和

唐内、コイツ一寸お茶番になつて居る○この國姓爺合戰は近松門左衛門の作にて、正徳五年十一月朔日より竹本座にて興行せしが、三年越十二ヶ月も興行した、古今の大入大當にて、其の後も屢く興行して屢く大入大當を取りし作なり、獨内地のみならず、長崎の通譯官某は、これを清語に譯して彼の國へ贈りしとぞ。斯る大當なりしかば、同く大近松の作で、享保貳年(三年後)に國姓爺後日合戰と云ふを興行したが、コイツは頗不評であつたとは面白い○支那と云へども今日と違ひ、交通不便な正徳と云ふ時代に、彼の國の事情を、手に取る様に仕組のみならず「キコライく、ピンクワンサツ、ブカンく」と、唐音だかヤン語だが、譯も分らぬ臺詞を遣ひ、目先を新らしくせし上に「父は唐土」「母は日本」と角書して、其の間の子の國姓爺

が、外國にて日本の武士道を發揮する、と云ふ点、如何にも當時の嗜好に叶ひ、斯く大入をせしものならん。(今日でもこんな作があらは大當は受合ひだ) ○全部は五段物で、この場は三段目○所は支那○時は春○登場人物は端役を除き五名○年齢は老一官鄭芝龍、五十位。母、四十五六。和藤内の國性命、廿位。甘輝、三十位。錦祥女、廿二。(以下畧す)

●御所櫻堀川夜討 辨慶上使の段に就いて

この堀川夜討は頼朝義經の不及及び義經の都落ちを種こして趣向せし歴史劇にて「一谷嫩軍記」に照應すべきものなり○作者は文耕堂と三好松洛の二人○作の年月なし、校正者として竹本上總、竹田出雲の名あり○全部は五段物にて、この場は三段目の切、口には梶原上使の段、同じ三段目に上使の二度はケトをかといひ○この狂言は狂

言ながら事實に近く、全体の趣向も、神佛の靈驗、幽靈、妖術なんぞの不思議は無い。が、其の替りトント趣向に山が無い。アノ靜の三味線にて藤彌太との立廻りの如きは、見たる所一寸面白けれ共、この時代に三味線を道具に遣ひしは如何。と批難する迄もない、同じ時代に菅原(二の谷)は二曲、阿古屋は三曲を演じて居る。そればかりでない、袖萩はそれより百數十年前(康平年間)に已に三味線を弾いて居る。サテ之れが狂言、ソんな事咎め立てする人は野暮○この辨慶と云ふ人物「東鑑」と「平家物語」に名前が見ゆるからには、有つた人ではあらうけれ共、他には確とせし事蹟は無い「大日本史」にも辨慶の傳は無い、ダカラ抹殺博士の重野先生は有名無實の人物と、斷定せられた様な譯だから、なんとなう氣が差して…… ○「跡にも先

にもタツタ一度てんでろな事して。「三千餘年の溜め涙」なんぞと俗に詔ひし作意、僕は敢て諾はね共、前さへよければこれも結構。所は京都。時は末秋。登場人物は端役を除き六名。年齢は辨慶、三十五。卿の君、十九か二十。の外他は皆狂言に依つて生せし人々にて侍従太郎、五十位。花の井、四十位。おわさ、三十四五。このぶ、十七。(以下畧す)

●戀女房染分手綱沓掛村の段に就いて

この染分手綱は近松門左衛門の作の「丹波與作」「關小万」と角書して「待夜小室節」と云ふものを、四十五年の後、寛延四年の二月増補したものだ。○作者は吉田冠子、三好松洛の二名。○この伊達與作と云ふは丹波の國の城主動木



殿の家老、伊達與三兵衛の悴なれば、丹波與作。この與作の事蹟については唯當時(寛保延享頃)流行せし小歌に名の有るのみにて、別に正し書物の上に、見るに足べき、事蹟は無い。其の根據とすべきは小唄の鎗さび、又は忠七の由良の助の曰く位のもの。小萬と雖亦然りて元祿の頃東海道關宿の飯盛の御職で、美人であつたと聞く、或る小唄の一節に「關の小萬のなさげごこ」云々とあるが、これ迎も別に確とせし事蹟は無い。殊に況や、三吉重の井に於いてをや。與作踊りの事は、馬子唄の段に云ふ。○小万(藝者いろは)は與作の妾、重の井は本妻二人の女房が有るから戀女房染分で。手綱とは、與作、三吉、一平の八藏等が皆馬方となつて居るからである。○全部は十三冊物で此の場は六段目で七段目が桂政殺し。十段目が子別れ即ち道中双六

の段である○全體この作柄は面白くない。殊に十二段目で。與作が如何に金が欲きとて、吾子と知らず子供の三吉に大名の金を盗ませんごする、三吉も親とは知らねども、頼まれたからとて、竟に大名の寐所へ忍び込んで三百兩と云ふ金を盗取る。云ふまでも無い三吉は竊盜、與作は竊盜教唆罪である。之れが何の孝行、何の忠義であらう。悪人の官大夫よりも、子供を教唆して竊盜をなさしめし、與作の方がどれ程罪が重いかも知れぬ。ソレを父なり役人なる、左内、彌惣左衛門が知りつゝ、咎めざるのみならず、これを一廉の手柄でもした様に、歸參がかなつて。其の場で重の井と祝言させる。イヤハヤ倫理にも道德にも法律にも背いた與作ではない悪作だ、實に不都合の作と云はざるべからずた○時は秋○所は伊勢○登場人物は下

役を除き四名○年齢は一平の八藏、廿四五。母、五十位。與の助、五ツ。桂政、三十位。

●戀女房染分手綱 馬子歌の段に就いてこの染分手綱の大體の譯は、沓掛村に云うて置いた○全部は十三段物で、此の場は十段目で道中双六の場とも、子別れの段とも云へど



も、口を語らず「おそばの衆」から語れば馬子歌の段と云ふが正當だ○丹波與作の小室節と云ふは、「山も見えざる假初に、江戸三界へ行かんして、いつ戻らんす事ぢややら、殺して置いていかんせの、放ちはやらじ」云々。これはこの「口」で女中共の唄ふ處である○與作踊と云ふは、お房徳兵衛の心中の口説文句にて「丹波與作」(大近松作)の大

切にある○同じ「丹波與作に」姫君の臺詞として「與作は丹波の伊達男と、歌に謠ふはこの人か、關の小方は双紙に有る、繪を見たよりはよい女房」とある(番掛村の段参照)○布引の瀧の綿繰馬に小万の戸籍が有る○本田は入間家の奥家老なれば、臺詞も殊更に阪東訛になつて居る○が、入間殿なら、入間詞にしたら尙一層、面白からうと思はる、○重の井の名、與作と幼馴染と云ふので筒井筒の文を轉用したのではあるまいか○作は寛延四年の二月で、殊に増補の二字が有る○作者は吉田冠子と三好松洛の二名○芝居ではこれを書直して「忠孝染分纏」と名題して、三吉を、おさんと云ふ娘にした趣向が有る、是れは増補の大増補か、否焼直して、一向筋か通らぬ物だ○所は丹波○時は冬○登場人物は端役を除き四名○年齢は姫、十二。三吉、十一

重の井、廿八九。本田、十三四。(以下略す)

●戀娘昔八丈 城木屋の段に就いて

城木屋のお駒(白木屋のお熊。江戸新材木町。材木商の庄三郎の娘)が慾心の爲に亭主を殺し、享保十二年二月廿五日鈴ヶ森で所刑を受けしは事實なれども、此の事實のみでは、花も香もなく、且淨瑠璃にも成りかねる處から、此の事實を反對に、善人を悪人とし、悪人を善人とし、て演繹し、若殿千草之助の放蕩、秋月一角の不忠、才三の流浪、勝時の茶入の紛失等無實の事を取合せ、七段續きの物とした。素より城木屋と評定の段と鈴ヶ森との外は、根據とすべき事實は無い○全體の事實は、鈴ヶ森の段に云うて置いた○全部は七段物で、此の場は五段目の口○作は安永四年九月九日で、江戸境町薩摩座で興行し

た○作者は松貫四と吉田角丸の二名○時は冬○登場人物は端役を除き六名○年齢はお駒、廿三。才三、廿五六。庄兵衛、六十位。お常、四十八。丈八、三十八。喜藏、三十五六。(以下略す)

●戀娘昔八丈鈴ヶ森の段に就いて

享保年中、江戸新材木町に白木屋(白子屋)と云ふ材木屋が有つた、主人庄三郎(六十位)は病身にて、營業も不振身代も不如意の爲、娘のお熊(お駒、廿三、五ツになる子が有つたと云ふ)の美目よきを餌に、持參金の聲又四郎を迎へた。が、お熊は元來の淫婦なれば手代の忠八(丈八、三十八)を初め他にも奸通せし男が有つた。なれども母のお常(四十八)は強慾無慙な女なれば、娘の不始末を知りながら咎めもせず、却つて之を助長ならしめしのみならず、母子共謀して、又他より持參金の聲を

迎へんごした。が、現在の夫又四郎が邪魔になる。ソコで殺意を起して、是を殺さんとして果さず(今なれば謀殺未遂罪)。されどこの事表沙汰となつて、竟に大岡越前守の裁許で。享保十二年末二月廿五日、鈴ヶ森に斬罪梟首となつた。この事實を狂言に仕組んだは、松貫四、吉田角丸の二人で、お熊が引廻しの時、八丈絹の衣物を着たと云ふに因んで戀娘昔八丈と名題を上げ。初めて安永四年九月九日境町の操人形薩摩座で興行した。されば才三郎(廿六七)喜藏(三十)堤彌平治(四十五)等は架空の人物、又勝鬨の茶入なんどは素より無根の事である。○サテいつも云ふ事だが、如何に面白く作して有つても、斯の如き不貞淫奔なるいたつら者を、孝行娘か節婦の様に「親々に順へは云ひ替した夫へた、ず」なんのと、憫れらじき文句をつけて子女の

同情をひかんとするは、實に風教上少なからぬ害を生ずるであらうと眞面目に議論をする程の事でもないテ○時は春○登場人物は端役を除き七名

●蝶花形名歌島臺 小阪部館の段に就いて

これは太閤記の一節、と云へば一節だが、云はゞ中國征伐やら四國陣やら、アソコや此所を勝手次第に取合し、例の歴史的の夢幻劇で○大將の名ばかりでも、大内、大友、柴田(後家小谷の方)眞柴、足利等澤山に集めたものだ○この蝶花形に限らず、この丸本でも事實を臺に、事實らしく辻褄を合せしものがマア上乘の作と云ふものた。ツレがこれはまた支離滅裂、作の筋も通らねば如何にも事實に遠くして殆評も出来にくい程な作た。併狂言としては、場面の變化に富

んで居るので、見た處は面白く出来て居る○全部は十一段物で、此の場は八段目の切である○小阪部兵部音近は長曾我部元親、他は云ふ迄もなからう○角書に「智君は源家の類葉」「嫁君は平家の落人」とある、この源家の類葉とは大内義廣。平家の落人とは信長の娘春姫をさしたもので、軍が和睦になつて婚禮するから、それで、蝶花形の島臺。また小谷の方、娘大隅太夫が、勝家の辞世の「夏の夜の夢路はかなき跡の名を雲井にあけよ山郭公」と書きし短冊を持つて居た爲末期に至つて親子の名乗が出来ると云ふので、夫れで名歌の二字を加へたもの。これは十段目の岩國山の段で、マア大詰である○作は寛政五年七月○作者は若竹笛躬と中村魚眼の二名○時は秋○所は安藝か○登場人物八名○年齢は音近、六十。葉末、三十位。眞弓、廿七八。松

太郎、十才。笹市、十才。宗貞、三十三四。正清、三十五六。和田藏、三十位。
(以下略す)

●茜染野中の隠井聚樂町の段に就いて

梅の由兵衛は、實名を梅澁吉兵衛とて、大阪聚樂町に住じ、竊盜杜
驅の術に長じ、始めて胡椒頭巾と云ふを發明せし程の悪黨なり。(胡
椒頭巾とは、紙袋に胡椒を入れ夫れを往來の人に冠せ、其の人のこれにムセンで居る内に
懷中物など盗み取る工風なり。これに基いて、芝居では、本人が鍔頭巾を冠つて出る事
になつた、翻按なれども面白い考へだ)これが女房の小梅は、吉兵衛より十五
六才も年上の姉女房なれども、詐欺賭博の巧なる上、容色も醜くか
らざりしかば、年は違へども、同意相投じて、夫婦となつて居て、
共に悪事を働いて居たは、阿波の十郎兵衛夫婦にも勝れし者共なり

○元祿二年五月十九日、天王寺屋久左衛門の小者長吉が、金百兩を
持つて引替へ行くを探り知り、欺いて吾家へ連れ歸り、小梅は聲立
てさせと後より、蒲團を冠せ、吉兵衛は刀にて斬殺し、死骸は小
初野の古井戸へ投げ込みたり。此の事程なく露顯に及び、吉兵衛は
同年六月十九日捕縛され、竟に磔刑に所せられ。小梅はこの時大阪
拂となつたが、これも程無く子殺を爲し、また磔刑にせられしとぞ。
されば、長吉は小梅の弟でもなければ吉兵衛は、古主の爲に盡すと
云ふ忠臣でもなければ、刀の事は素より無根、また男達でも、俠客
でも無い、純然たるお泥棒様に御座候。○所は大阪○時は夏○作は元
文三年十月(豊竹座)○作者は原田由良助、並木宗輔添削○登場人物は
端役を除き四名○年齢は由兵衛、三十位。小梅、廿二三。長吉、十五六。伯

母、五十位。(以下略す)

●明鳥後正夢(雪廻曙)山家屋の段に就いて

淨瑠璃(義太夫)より新内常盤津等へ入りし物は、其の數枚擧に違あら
ず。夫れに反して、新内常盤津より義太夫に入りし物は曾て無し。否
一ツ有る、其の一ツは即この明鳥である。この明鳥は淨瑠璃史に目
録は出て居る物なれども、丸本は無いので有る、丸本が無ければ全
體の趣向は不分明で有る(僕は鬼丸越女で見たから知つては居るが)義太夫と
しての語り場はこの山家屋一段しか無いので有る。○此の事實は、江
戸藏前の豪家の悴伊之助と、吉原扇屋の遊女三芳野と、例の事情に
依つて明和六年七月三日の夜□□にて情死した、時に伊之助廿一才、
三芳野は廿四才であつた。寺は本所猿江の慈眼寺で、二人の辞世の歌

を彫りと石碑今も在りと云ふ。當時心中は至つて珍らしかりければ、
これを狂言に仕組みしもの、世に憚る處ありとて、夏を冬とし、伊
之助を時治郎、三芳野を浦里として、弘化四年大阪大西の芝居にて
興行せしが始なり、この時の淨瑠璃は(義太夫にあらず)鶴賀馬蝶が出語
して大入なりしと云ふ。されば金岡の掛物の事、雪責の事、縁と云
ふ子持なりし事等は、無論無根の事なれども、當時吉原には、子持
の遊女もあり、遊女の虐待は當時の風にて、或は雪責にせし親方も
ありしならんか、夫れや此れを綜合して、この山家屋の段は出來しも
のであらう。○作及び作者未詳(義太夫として) ○所は江戸 ○時は冬 ○登
場人物七名 ○年齢は浦里、廿四。時治郎、廿三。みどり、六七才。おた
つ、三十位。おかや、四十位。勤兵衛、五十位。彦六、三十二三。(以下略す)

● 近江源氏先陣館 盛綱陣屋の段に就いて

この近江源氏は、鎌倉三代記と同意同趣向にて。大阪陣を北條時代に書きなせしものなり。されば人名地名も皆三代記の通にて、頼家(秀頼)宇治の方(淀)片岡造酒頭(片桐市正)佐々木盛綱(真田信幸)同高綱(同幸村)同小四郎(大助)和田兵衛(後藤兵衛)三浦助(木村長門守)等の名を用るたり、時姫は千姫にて、これは秀頼の室なれど、夫れを長門守の三浦に戀着せしとして、その三浦が塩賣長藏(實は長二郎にて、寶曆九年京都に鼻首せられし悪者にて、これには面白き物語あれども、此の場に要なければ略す)と身を扮して居る。その塩賣の三浦と、祝言して名香蘭奢待を焚込めし兜を駕引手とす(これ三代記の文句に照應す)。併これは七段目の事だ。この場に「時まつ。平時政」と云ふ文句があるが、之は家康と云ふ意を

含んだ詞なれば「時まつ」で切らず「時まつ平」と切つて「時政」と語る由、この淨瑠璃の口傳なりと云ふ。○大體の事は三代記三浦別れの段を見られよ。○全部は九段物でこの場は八段目の切。○この近江源氏は明和六年十二月の作で、三代記より五十二年後の作だ(竹本座)。○作者は近松半二、八民平七、三好松洛、竹本三郎兵衛の四名。○所は近江。○時は冬。○登場人物は端役を除き八名。○年齢は盛綱、四十位。微妙、六十位。篝火、三十三。早瀬、三十五。小四郎、小三郎共に十四才。時政六十位。和田兵衛、三十五。(以下略す)

● 芦屋道満大内鑑 狐子別れの段に就いて

この大内鑑は朱雀帝の御宇の事と云へば相馬將門と同時代で、今よりは千年の昔の大時代物である。○安部晴明、芦屋道満の二人は共に

陰陽司にて實有の人、他は皆例の假空の人○大體の趣向は、晴明、道満の術争ひせしと云ふ俗説と。昔京阪地方にて云ひ傳へたる、大和葛城山の麓の獵師某が、狐を妻にせしと云ふ俗傳と。書名は忘れしが「百歳の狐、人の鬮體を戴き北斗を拜する時は淫婦と化す」と、また「昔唐土の美仙娘と云ふ狐、南京城外の民、黄塚の妻となり、黄繼と云ふ叡智なる子を生む」と、云ふ怪談を取合せ。夫れに金鳥玉兔集と云ふ、曆の本を取り合ふ旨を絡んだ仕組みで、事實は素より無根である○草の葛の葉は、風吹く度に裏を見するものなれば「恨み葛の葉と」は恨につかふ枕辞、其の枕辞に思ひよりて、葛の葉と云ふ人物を設けしは、なか／＼作者も御骨折○この子別れの文句は大近松の百合若大臣野守鑑の「鷹の子」の文句を倅めたもの、其の又

文句を、(この葛の葉の作より)廿五年の後「柳」の翻按したは妙た○全部は五段物で、この場は四段目の切○作は享保十九年十月○作者は竹田出雲○所は攝津○時は初秋○登場人物は端役を除き六名○年齢は葛の葉二人共、廿二三。保名、廿七八。童子、五才。庄司、五十位。母、四十三四。(以下略す)

●三十三間堂 平太郎住家の段に就いて

此の「柳」は丸本にては「三十三間堂、平太郎縁起」の角書があつて「祇園女御九重錦」と外題せしものにて時代を鳥羽院の御宇として、平忠盛の本妻池殿が、嫉妬の爲妾の祇園女御を苦しまするを骨子としソレに種々なる因果説を附會せし、佛敎主義の夢幻劇で○それで此の住家の段は三段目の切にて○作は寶曆十年十月○作者は若竹笛躬

中邑阿契の二人で、今の平太郎内の段の文章は、丸本とは大きに相違がありて、五行本には増補の二字が有る。又語り口も彈き方も昔とは違ふ由、是は先年物故せし綱太夫が添刪せしものと聞く。○全部は例の五段物にて、この五段の外に、千二三百字の發端が一段有る。この發端も昔は大序として語りしもの、由にて。其の趣向は、熊野の谷間に榎と榎の連理枝せし大木が有る。それが蓮花王坊と云ふ修驗者の行場であるから、修行の妨になるとて枝を切つて縁を斷つ、之が爲め蓮花王坊も慢心を生じ魔道に墜つ。此の蓮花王坊の後身が白河の法皇、榎が平太郎、榎がおりう、此の夫婦の中に出來たが縁丸、之が後に平太郎と改名して、親鸞上人の弟子となりて、眞佛坊と名乗る高足。又この奇怪なる趣向の外に、鹿の怪談なんぞもあつて

大体の作柄は如何に狂言なれば、馬鹿々々敷まぞに奇怪に過ぐる所謂木に竹を繼ぐのでなく、柳に榎を繼いだ様な作だ。併是は大体に就いての事で、此の三段目にしてからが、雪の降り積りし畑中から大根、蕪、獨活、山葵を堀り取るもをかしい。イヤ紀州は暖國だから雪中にも大根も蕪も有る。されば、暖國には似合はぬこの大雪はごうだ。其の大雪の降る季候に、青々とした柳の葉の散り來るも又をかしい。ソレに其の日の食に困つて野荒しをする程の者が、信心とは云へ、高燈籠の油買ふ程の錢も有り、又「サアわつさり最一ツ呑ふ」との小酒宴。酒の置き買もして有ると見える。とは理屈、併曲としてはなかくに興味が有る、殊に段切の木遣音頭の如き、一場の悲劇も是が爲わつさりと氣の變はる所なんぞは實に妙だ。理屈

は差し置き、曲として面白きもの、流行するも無理ならずと思はる、○所は紀州熊野○時は冬であらう○登場人物は端役を除き五名○年齢は縁丸の五ツの外更に依る所なし、思ふに平太郎、廿三四。お柳、廿四五か。老母、五十前後。隼人、四十前後。和田四郎、三十四五位。のものならん(以下略す)

●鬼一法眼三略卷 菊畑の段に就いて

これは平治物語や、源平盛衰記を骨子とせし、例の歴史的夢幻劇で事實に遠いは勿論だが、合作物に似合ぬ筋はよく通つて居る○全部は五段物で。初段貳段は清盛の熊野詣でに始まり、辨慶の出生、牛若丸の生立より書寫山の段。それに鬼一、鬼二郎、鬼三太の兄弟。常磐御前、藤原大藏卿等を絡んだもので。三段目の口は清盛の館。

切がこの菊畑の段で、四段目が檜垣及大藏卿の館で、五段目が五條の橋辨慶で大詰である○この三略卷は芝居ですれば菊畑は勿論、大藏卿の館でも、五條の橋でも、倚麗で、花やかで、面白いもので、中幕物にも大切的一幕物にもよき物なれども、一段づゝの語り物として、余り場面が廣すぎて、妙ならぬ處も有るが、されども此の菊畑でも五條の橋でも(五條の橋は殊に糸物として)、懸合ものとすればよい○名題の鬼一法眼は人の名前、三略卷は六韜三略とて唐土の兵書の名、それを二ツ合せしまでで無雑作極まる名題である○作は享保十六年九月○作者は文耕堂と長谷川千四の二名○所は京都○時は秋○登場人物は端役を除き五人○年齢は鬼一、五十位。皆鶴姫、十七八。智慧内(鬼三太)、廿七八。虎造(牛若)、十六。笠原湛海、三十位。(以下略す)

●吉例我曾譚對面の段に就いて

此の曾我と云ふものは、吉例と有つて、昔は顔見世狂言には其の仕組の何に依らず、曾我と云ふ二字を冠せしものにて、彼の揚巻助六の白酒賣が、曾我の十郎祐成とは、如何にも附會中の附會なれども、例の曾我の二字が吉例と有るに依り、止むを得ざると云ふのであらう○曾我の二字を冠せし義太夫ものは○

昔見臺○錦凡帳○虎が石磨○三部經○五人兄
 弟○會稽山○扇八景○また下に加へしは○加
 増○記録○江戸愛敬○元服○根元○本領○新
 本領○百日○團扇○世繼等で、また中に加へ
 しは○御前曾我姿富士○記録曾我玉笄鬘等な

(芝) (工) (三) (五) (十) (五)

り以上丸本なれども狂言の名題には、また此の外に何程もある○近頃壯士劇の喜多村縁郎等の對面を見た。其の筋は、歌舞伎を臺に、ソレに壯士劇は壯士劇らしく、近江、八幡の鴻門會らむき劍舞があり、十郎の乱舞は、仁田四郎の吟聲にて一指、かの難物と云ふ足拍子は、五郎を送つて十郎が、花道の附際にてたつた一ツトン。よく極つた。ソレで引こみと云ふ仕方、この仕打頗る妙。云は、日本料理にヒブテキかオムレツの取合せ、處がよく調和して面白い流石に新俳優連もなかく腕は上つたものた○この曾我の講釋は、女郎屋の亭主、大黒屋宗六さへ知つて居る事だから、今更説くは管なるべし、併調べたくは、早稲田の近松研究を讀むがよいさ○時は春。一月の初會、または十二月の納會の懸合物によろし○舞台は常足の二

重に、庵に木瓜の散紋の金襖、軒にも同ト紋の幕を懸くべし。○二重の上には圖の如く糸は例の處、工藤、近江、八幡、大名(幾人でもよし)朝比奈。平舞台の上手には虎に少將、下手には見台ばかりで、五郎十郎はキツカケについて座に出づべし。○この懸合には大幕をひき、幕内より口上を述べ、口上の終りへ時の太鼓を冠せ幕明く、直ぐ三重○肩衣は五郎は千鳥、十郎は蝶、朝比奈鶴の丸の紋等、夫れ趣向あるべし。○これは素より本行ではない、芝居振りを義太夫で見せる(聞かせるに非ず)のだから、身振り思ひ入れイヤミ澤山、氣障ドツサリ、出來得る限り、歌舞伎たまへ決して御遠慮御無用に候。○作者作の年月未詳。○登場人物大名を除き八名。○年齢は十郎、廿三。五郎、十七。工藤、三十四五。朝比奈、廿七八。近江、三十位。八幡、廿八九。虎

、十九。少將、十七八。(以下略す)

●祇園祭禮信仰記 上燭屋の段に就いて

祇園神社の定紋は「瓜」の紋なり。織田家の定紋も「瓜」なり。信長午頭天王を信仰するの余り、家の定紋つきたる什具を、祇園神社へ奉納せしに依り、其の後、祇園の紋は「瓜」になりこと云ふ。盖信じ難し、夫れは兎も角、信長の祇園神社即、午頭天王を信仰せは(京都及び尾州の津島とも同神なれば)事實なれば、それに依つて斯る外題を据たものと思はるゝ。また信長記(しんちやうき)と云ふ書物あり(作者未詳)これは云ふ迄も無い信長の一代記で、信長、信仰、國音近ければ、それを信仰記と名付しならん。祭禮の二字には別段の意味は無い。唯だ上下のつなぎに置きしものと思はるゝ。されば全部の趣向も、信長

の一代記で有るべき筈であるに、世界は足利家の没落にて、シテは松永大膳ワキは眞柴久吉、信長は第三者の地位になつて居る○全部は例の五段物で、初段大序の前に二百字ばかりの小序が有るこれは狂言詞で一才異例。この上爛屋は三段目で口が道行「憂身の笠」。中がこの場で「麓」ものとして節尻が他の物とは違ふ、切が是齋の内の段で。この是齋と云ふは松下嘉平治で此所へ久吉が昔の詫に來る。この趣向を翻按したは三日太平記の九段目で三日はこの信仰記より十四年後に出來て居る○もう一ツ面白いは、山口九郎治郎は淺井の間者で明智光秀は一才妙だ○有名な金閣寺は四段目の切で、三姫の一ツなる雪姫の見せ場は此所た○作は寶曆七年十二月で、例の歴史的の夢幻劇である○作者は中邑阿契、豊竹應律外三名の合作○所は攝

津、岸野の里は天下茶屋の古名○時は秋○登場人物は六人○年齢は輝若、六才。新作、廿二三。木藏、卅五六。礫の三、廿七八。官太、三十位。サテ侍従(かちへ)の年は本文に「十をかさねし富士の雪、きえてはかなくなりけり」とあり。十を重ぬれば廿なれども、六ツになる輝若を實子と云へば。廿なれば十五の時の子になる譯、如何に驕奢淫靡なりし室町時代なればとて十五才で子を生みしとは、如何にも早婚と云はさるべからず。併十五才にて産する者も世に無き事ではなけれども、殊に少女に懷妊さする必用も認めねば、廿才とは信じ難し。業平の東下は、富士を見て云々の故事も有れども、これも茲には引き難し。さればこの富士の雪云々の文句は疑問として存し置き、仮に廿五六と定むるがよかるべし(以下略す)

●義士忠臣藏 本藏下屋敷の段に就いて

桃井若狹之助の名は、高、鹽谷に對する足利時代の武士の假名で、其の實は左京亮伊達宗春。加古川本藏は御廣敷用人梶川與三兵衛の假名で、この二人は實有の人だが主従でもなんでもない。縫之助とは内匠頭の弟大學をさしたものとたか、これも云號でもなんでもない。他は皆架空の人、イヤ人物ばかりでない、此の下屋敷からが無根の事だ。○三千歳の名は桃井の桃に依り、井浪の名は播州に印南郡と云ふ郡名が有るに依る、また梶川の名を加古川とせしは、音の近き播州の地名に依りしもの、コレヤほんさうの話でゑる。併播州は淺野(鹽谷)の領地で、伊達は(桃井)伊豫の吉田に在城す伊達の家來の名に播州の地名を附けしはコイツ作者か感違をして居るのだ。○作者の名前も

作の年月も未詳。○全體この一段は、菅原の松王屋敷と同寸法で、忠臣藏の作者が立て、置いた、蔭の趣向の底を割つて仕舞つたので。モシこれを順序の如く九段目の前に演ずるとすれば、九段目で小瀬と戸無瀬か「ヤアお前は父様、本藏殿」と驚いても、見物は本藏が虚無僧に成つて居る事は、先刻承知して居るから驚かないのみならず、力彌の突懸る鎗先を受る場合に及んでも、力彌のために死ぬると云ふ了簡か見物に知れて居れば、其の立廻りか、危険でもなければ面白くもないのである。イヤ飛んでもない作意だ、蛇足だ、あらずも哉。○サテ此の本藏と云ふ男はトンと腹の分らぬ人物で、二段目三段目までは、年輩相應な分別も有りさうなれど、この下屋敷ご九段目では、殆人の替つた程馬鹿な舉動をして居る、この下屋敷の段

ではツマラヌ事ばかりして居る呆れた者だ、先第一は、井浪か毒を釜に入れて「列をならべて皆殺し」と云うて居るのを知りながら「云はぬぞよ」など、落着き拂つて居る、幸ひ誰も飲む者が無かつたらよいやうなもの、若し知らずに飲む者が有つたら、大騒ではあるまいか、ナゼ云はぬであらう、番左が恐ろかつたであらうか、マサカさうでもあるまいに。また番左も番左だ、敵方の廻し者が國家を望むと云ふ程な謀反人ならイサ知らず、唯三千歳に惚れて居る丈の人物で、ソレで其の目的は目前に遂げらるゝと云ふ場合に、殿を始め一家中を皆殺にして何とする、此奴の腹もトント分らぬ。が、併其の場も去らず手打に逢ふ程の奴だから、論ずるに足らないが。よゝ年をしてこの本藏。見込の通り大星に敵討の所存が有らば小浪は

若後家、ソレも武士の意氣地、人の落目を見捨てぬと云ふのなら、尤な處も有るが、もと大星が、眞の放蕩者であつたら何とする、其の虚實をも確めず、重き國家老の身でありながら、若輩短慮の殿を見限り、如何に娘に、戀聲か持せたいとて、力彌の手に懸つて死ぬる覺悟はナト輕卒では有るまいか。イヤこの了簡から考へると、大星に敵討つ所存なく、山村村の大地主で、樂々と一生を暮して居る方か、小浪の爲にも仕合せ、自分も満足で有つたかも知れぬ。いよゝ大星に敵討つ準備が有ると聞いて口では「唐土の豫讓」心の中では「オヤゝ」と思つたかも知れぬ。ユイツ武士道を履違へて居る。武士道を履違へて居ると云へば、桃井殿も困つたものた、若狹之助の短慮な性格は、大序貳段目三段目にもありゝと見えて居る、短慮

とは考の淺き事、考の深くないはマア馬鹿と云ふ事だ。不忠者でも近習頭の井浪を手打にし、國の柱石とも云ふべき本藏に永の暇を遣はし、後の國政をどうする積だ、とは拙者が心配するばかりで、御本人は一向にソンの事には頓着なく「そちや討れて死たい心であらう」といふは誤名察だが「判官を抱き留めたは、そちか誤り」とは如何、ナゼ判官を抱き留たが誤だ、意趣や意恨や歎討は別問題として、白刃をも恐れず殿中にて狼籍者を取押へたは適の手柄で、事實の梶川はこれが爲、五百石の加増の得て居る、主か主なら家來まで、揃ひも揃つてよくもマア考へ違ひをらたものたなア○ソコでこんな詰らぬ駄作が、世に流行して居ると云ふは、不思議なりト云ふべからずこれ全く忠臣藏と云ふ、老舗の暖簾のお蔭のみた○近頃口上にも招

にも、この場の事を忠臣藏八段目と云ふは以ての外の事だ、八段目は確と「道行」である。これは矢張、義士忠臣藏と云ふ方がよい○枕の文句は「人むれぬ思のみこそわびしけれ、わか歎をばわれのみぞ知る」と、云ふ古歌を誤まつたものだ○所は江戸○時は冬○登場人物は腰元小性の下役を除き四名○年齢は本藏、五十五六。若狭之助、廿五。井浪、三十位。三千歳、十六七。(以下略す)

●岸姫松轡鑑 朝比奈上使の段に就いて

北條時政は平氏である、それ故、源氏の頼家を殺し天下を掌握せんとする、これがこの轡鑑の全部の骨子で。ソレに絡んで巴御前、朝比奈または齋藤實盛の孫の齋藤五郎等を出し、其の外尼御臺を初め和田義盛等の鎌倉大名を並べた、其の中に蒲冠者範頼の娘司姫と云

ふが有る、これを當今の一の宮へ、入内させよとの勅命があるが、この司姫は豫て頼家と通つて居て、懷妊して既に五ヶ月である、それを時政が知つて居て、源氏の枝葉を刈り盡さんとして、勅命に托して殺さんとす、これからの三段目だ。この三段目は「堀川夜討」の辨慶を踏へた作で、本文にも一寸ほのめかしては居るが、堀川夜討に劣る事は數等である、大詰には齋藤五か頼家と取替子と云ふ事を知つて源家へ歸服し、住吉(攝津)で生れ島田宿(東海道)で育つて馬子して居たと云ふのぞ名を島津冠者忠房と名乗り、定紋を轡とす(薩摩侯)ソレで住吉だから岸姫松、定紋が轡だから轡鑑ナンご妙でせう。ソコで時政の隱謀露顯して牢輿にて伊豆の北條へ流罪で目出たしくである。イヤハヤさうも驚入つた愚作である、事實を没却す

るのみでない、小説ごと狂言としても、一貫せし趣向も山も無い、其の癖詰らぬ小刀細工の跡か澤山見へて堪らない支離滅裂メチヤくを作た。ソレで作者は豊竹應律、若竹笛躬(外四名)等の顔揃ひたから尙をかしい。斯んな拙い作柄で、今日なほ流行して居るは不思議ト云ふべからず、全く作は拙くとも曲章がうまく出来て居る「手」のつけ方がうまいから、一段の語り物としては、立派な物を聞いても中々面白い。かうして見ると作も作だが「手」を付けると云ふ事は云ふ迄もない事だが、中々もつて難い哉だ。○全部は五段物で豊竹座○作は寶曆十二年閏四月○所は鎌倉○時は三月○登場人物は下役を除き七人○年齢は兵衛、五十位。藤卷、三十七八。隼人、廿二。與茂作、六十位。おそよ、十八。朝比奈、廿五六。司姫、十六七。(以下略す)

●伽羅先代萩竹の間の段に就いて

この先代萩の大體の譯は御殿の段に云うて置いた○全部は九段物、この竹の間は六段目の端場で、御殿の口である○政岡は淺岡、本名は、はつ子、墓は仙臺躑躅ヶ岡に在る○沖の井(名所有)八汐の名は壩竈なんその海に依つて名附けしか、小牧と云ふ地名、仙臺近傍に在りと云ひと人あり、如何にや○忍の者、丸本には名無し、芝居ではこれを鳶の加藤次と云うて、三階から出る端役である○ソレを或年、故尾上菊五郎か演た事が有つて、「政岡殿に頼まれた」と云ふ臺詞が馬鹿にうまかつた。妙なもので、上手が演るこ、そんな端役でも見せ場は出来る。ソレから以來は、これが飛んだよい役になつて、今は相當な立役から出る事になつた、尤政岡への御馳走ではあるが○義

綱公の隠居ありと所を、鎌倉と云ふは、例の世を憚りし假名で、實は江戸深川の下屋敷たと云ふ○この御殿は仙臺の城中なるべし○時は初夏○作は天明五年の正月○作者は松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸の三名○登場人物端役を除き七名○年齢は鶴千代、千松共に、七八才。政岡、三十三四。沖の井、三十三四。八汐、五十位。小牧、三十七八。加藤次、三十一二。(以下略す)

●伽羅先代萩御殿の段に就いて

是は万治年中に起りし、伊達家の御家騒動を種として仕組みしもの○作は天明五年の正月○作者は松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸の三人○全部は九段物で、この御殿は六段目の切で、口が竹の間である○この丸本、大体の趣向に無理が無く、筆もよく廻つて居る○伽羅と

は結構な意味、ソレをめいほくと讀ませ、先代とは勿論仙臺にて、萩は宮城野の名物だからソレを取合せたのかこの名題○この先代萩には色々書き替へた狂言も澤山ある、甚じきは「老後の政岡」などと云ふべき物も有る。併事實は「伊達顯微録」を初め坊間には小説やら稗史やら數限りも無き程澤山あるが、信用すべきは一ツも無い。最も「藩翰譜」は文は簡なれども事實は正確である○政岡は本名淺岡この淺岡の碑は仙臺躑躅岡に今も在り、僕も先年參詣した。丸本での年齢三十三四○丸本の貝田勘解由、芝居の仁木彈正、本名は原田甲斐、三十五六。松前鐵之助は松前重光、三十前後。渡會銀兵衛は渡邊金兵衛○頼朝公は徳川家○梶原平三は酒井雅樂頭○鶴喜代は龜千代。大詰の文句に「池の龜千代の榮えを鶴喜代が」云々とあつて暗に本名を

ほのめかす、この時七八才○大場道益は河野道圓。以上は事實にある人物の變名せしもの、以下は狂言に依つて假設せられし人物○登場人物は端役を除き七名○年齢は八汐、五十位。千松、七八才。小牧、三十七八。榮御前、六十前後。沖の井、三十三四。曲者鳶の加藤治(丸本にては無名)三十一二。(以下略す)

●伽羅先代萩九段目 對決に就いて

先代萩の大體の筋は、皆さん先刻御存じの事○此の對決は萩の方では九段目、阿國戲場の方では十段目であるが、双方ともに丸本の儘にては面白くないので、夫れで此れは萩と戲場と外に、芝居の臺帳を取捨して一段としたもの、名前は戲場に依たものだが、マアごがちやがなものだ。サテ舞臺へ懸ると、飛んだ面白い物で、いつでも

受ける○時は一月の初會を除く外はいつでもよい○舞台は座敷や小
 審席では面白くない、必ず芝居小屋でないといかぬ、云ふ譯は前
 席(取り)が終ると直ぐ大幕を引く、(大幕の引ける
 席ならどこでもよい)○舞台は並二重の金襴、圖の
 如く二重に見臺四ツと糸、平舞臺に四ツ、勝
 元は「暫くく」のキツカケにて舞台へ出つ、
 他は皆な居ならぶ○口上は社社にて幕の外に
 出で「東西々々この場、相勤めますは、伽羅先
 代萩九段目(茲で一々太夫と役割を述ふるがよし)勤めますは一座惣掛合、い
 よく對決の段初まり左様」と、口上の切れ目へ、時の太鼓を打ち
 込み、木頭と共に幕明く。枕を喰つて直ぐ「大老宗全威儀を正し」か

- (一)
- (二)
- (三)
- (四)
- (五)
- (六)
- (七)
- (八)
- (九)
- (十)
- (十一)
- (十二)
- (十三)
- (十四)
- (十五)
- (十六)
- (十七)
- (十八)
- (十九)
- (二十)
- (二十一)
- (二十二)
- (二十三)
- (二十四)
- (二十五)
- (二十六)
- (二十七)
- (二十八)
- (二十九)
- (三十)
- (三十一)
- (三十二)
- (三十三)
- (三十四)
- (三十五)
- (三十六)
- (三十七)
- (三十八)
- (三十九)
- (四十)
- (四十一)
- (四十二)
- (四十三)
- (四十四)
- (四十五)
- (四十六)
- (四十七)
- (四十八)
- (四十九)
- (五十)
- (五十一)
- (五十二)
- (五十三)
- (五十四)
- (五十五)
- (五十六)
- (五十七)
- (五十八)
- (五十九)
- (六十)
- (六十一)
- (六十二)
- (六十三)
- (六十四)
- (六十五)
- (六十六)
- (六十七)
- (六十八)
- (六十九)
- (七十)
- (七十一)
- (七十二)
- (七十三)
- (七十四)
- (七十五)
- (七十六)
- (七十七)
- (七十八)
- (七十九)
- (八十)
- (八十一)
- (八十二)
- (八十三)
- (八十四)
- (八十五)
- (八十六)
- (八十七)
- (八十八)
- (八十九)
- (九十)
- (九十一)
- (九十二)
- (九十三)
- (九十四)
- (九十五)
- (九十六)
- (九十七)
- (九十八)
- (九十九)
- (百)

ら始める○元來この段は長いから、文句の取捨は各々の都合次第、
 どうヒチクツツても差支へはないから、思ひくく工風してタレヌ様
 にするがよし○随分いや身に、芝居する氣で語るがよい○着附肩衣
 の好みは各々の意匠に任す○茲に一ツ可笑習慣が有る、夫れは勝元
 を語る人は、樂屋一統へ蕎麥を振舞ふと云ふ事だ、が、必ず服従せ
 ねばならぬと云ふ義務は無いテ○登場人物は八名○年齢は山名、六十
 位。勝元、三十五六。鬼行、五十位。仁木、三十五六。外記、五十五六。民部、
 廿五六。甲乙役人、よいくらゐる。(以下略す)

●三日太平記 松下住家の段に就いて

これは太閤記の一節。秀吉松下に仕へし事、三面大黒天の事、桶皮
 胴の鎧の事。光秀、小栗栖の土民の手にかゝりて討死せしと云ふ事

等を取り合して作せし例の歴史的夢幻劇である○光秀が小栗栖にて死せしと云ふ事、古來よりの疑問なれども、マア死んだものとして置く方がよい○松下嘉平治は松下嘉兵衛○武智は明智○此下兵吉は木下藤吉郎○一作は作左衛門(?)なるは云ふに及はず、さつき、重二郎は假設の人このさつき太功記では母の名にて、光秀の妻の名は御存じの通り操である○また重二郎は名は同じけれども、此所では十三才、太功記では十八才○この三日太平記の作は明和四年十二月で繪本太功記の作は三十三年後の寛政十一年の作だから、此の三十三年の間に重二郎が五ッ年を取り、嫁が姑になる早さで、さつきが母となつたのではあるまいか。とは云へ茲に不審なのは此所でも、太十でも光秀の年は同じ五十五た、から妙た、と云ひたくなる○三日太

平記と外題せしは、此の九段目の口の文句に「三日天下の世の謔」とあると、大詰に「書きつらねたる太平記、千里も一步に始まれれば三日は三年も」と有るに依りしなるべし。また角書に「泉州小田居茶屋。攝州天下茶屋」とあるが、全體の作柄が例の故事附だから、この角書の意味も無理故事附で不感心た○趣向は違ふが五段目が本能寺で、信永(信長)が光秀の爲に詰め腹を切る。其の外太功記に、似寄つた趣向は一ツも無い○作者は近松半二、三好松洛、八民平七、竹本三郎兵衛の四名、竹本座○所は伏見○時は秋○全部は十段物でこの場は九段目の切である○登場人物は軍兵を除き七名○年齢は嘉平治、六十位。さつき、三十五六。一作、三十位。久吉、四十五六。小新吾、廿五六。(以下略す)

●新版歌祭文 野崎村の段に就いて

このお染久松は心中ではない。其の事實は、延寶七年九月廿九日、大坂東横堀瓦屋橋の側に住する油屋某の娘お染を、久松と云ふ丁稚に子守させ置きしに、誤つて近傍の川へ落し、水死なさしめかばお染の父大に怒り、柝檻の爲、久松を土藏へ押し込めた、久松身の誤りを悔ひて、自ら土藏の中にて縊れて死せしと云ふ。この時お染二才、久松十三才といへば、情死ならざるは云ふに及はず。され共、男女引續き横死せしごいふに依り、これを心中物として、最初狂言に仕組みしは、正徳元年の四月、紀海音の作にて豊竹座に於て一油屋お染袂の白絞」と名題を下して興行、大當り。次は明和四年の冬菅專助の作にて、北堀江座に於て「染模様妹脊門松」と名題して興行

是も又大當り。其の後安永九年九月、近松半二の作にて、稻荷座に於て「お染久松新版歌祭文」と題して興行、是も又大當りて有つたと云ふ、ソコでこの歌祭文と妹脊門松と對照するに作柄は妹脊門松の方がよいと思ふ、人物はお染久松を除きては、門松の山家屋は捌き役だが、此の方の山家屋は二枚目敵で、おくめは、お光、善六、太兵衛は勘六、小助、父の太郎兵衛は後家のお勝と云ふ風になつて居る○全部はいづれも上下の二巻物で、この野崎村は上の巻の二段目の切で、門松には似寄つた趣向もない、ソレで油屋の段は、いづれも大切になつて居る○年齢は門松の方ではお染、十六。久松、十五。であるが、この場では殊に予が臆斷で、お染、十七。久松、十六。お光、十八。久作、六十位。母、五十位。お勝、四十位。およし、三十位。として置

きます。○登場人物、船人、駕屋の端役を除き七名。○事實は九月なるに、兩作共に大晦日の出来事とせしは何に依りしか。○野崎の觀音は河内國河内郡にあり、大阪より約三里、今も在り。○この野崎に限り殊に本文を省略せし所多し、こは語方の都合に依る、全文を讀まんとすれば他の五行本、又は丸本に就いて見よ。(以下略す)

●神靈矢口渡 頓兵衛内の段に就いて

史に曰く「延文三年十月十日足利基氏新田義興ヲ矢口ニ誘殺ス」とある、ソレを臺に仕組しはこの矢口で。例の夢幻的の歴史劇である。○義興の矢口で殺されしは前文の如く事實で有るが、義興の弟に義峯と云ふは無い(大系圖)されば、義宗をさしたるものか、其の他は筋も人物も皆假空のものである。○貪(頓)慾が深いから頓兵衛、船人の娘たか

らお舟、龜に似た男であつたから六藏、娼妓でありながら、御臺所の様になつて居るから臺(うてな)と云つた様な事から、名をつけたものであらう。○矢口の渡は、荏原郡の内、スツト昔の東海道。今の東海道線の六郷、川崎の間に架りし鉄橋より、小一里、水上の所にあり、此所には義興を祀りし新田神社と云ふが今も有る。○全部は五段物で、四段目の口が道行、中が生麥の庵室、切がこの場、五段目が矢口神社の祭禮で、悪人亡びて目出たしくである。○作は明和七年の正月。○作者は古今の大才子、平賀源内の福内鬼外、補助として吉田冠子、玉泉堂、吉田二一の三名(江戸外記座)。○所は武藏。○時は冬。○登場人物は五名。○年齢は頓兵衛、六十位。おふね、十六七。義峯、廿四五。うてな、十九廿。六藏、廿六七。(以下略す)

●新薄雪物語 鍛冶屋の段に就いて

延寶年間の出版で、薄雪物語と云ふ、昔もの、戀愛小説が有る、それを翻按したもののだから、それで新薄雪物語○全部の趣向は、刀鍛冶の五郎正宗と、來國行との技藝上の争に、薄雪姫と左衛門との情事を絡み、末は普通の敵討になつて目出たしである○正宗の事、僕はその有無に就いては、未だ一定の見解がない、だから、茲に云ふべき議論も無い○時代物と云へば歴史劇で人名でも事柄でも、國史に載つたものでなければならぬ、歴史劇と云へば、多くは武家物、鎧兜に金襴で、譬へば太功記や盛衰記の様なもの、其の歴史劇即ち時代物の中でも、公家物とて祇園女御や妹脊山は、大時代物と云はねばならぬ、また世話物とは其の出來事は古くとも、歴史の上には影

も無い、民間の出來事で、曲輪日記とか、連理の柵とか云ふ町人物徳川治世の出來事だから、町人物でも侍も出れば、時としては金襴に長社袴と云ふ場も有れども、大體の筋が民間の出來事なれば、侍が出て金襴でも、世話物は世話物だ。ソユで時代物でも初段から大切まで鎧兜と云ふ譯では無い、舞台上の取り合せで、一段か二段は必ず民家、所謂世話場が有るものだ、それは盛衰記の辻法印さか、三代記の渡し場の段の如きもので、これは純粹な民家なれども、大體が歴史劇だから、時代物と云はねばなるまい。それを一口に時代世話と云ふ。また妹脊山の杉酒屋や信仰記の上爛屋等も、これも一口に時代世話と云ふは心得ぬ事である。要するに、歴史に關するものは時代物、歴史に關係の無き民間の出來事を世話物とすればよ

い、と斯く定義を下して置いて。サテこの新薄雪に「時代世話」と云ふ四字の角書が有るが、此の角書はなんの意味乎、初段が鎌倉の新館で金襴だから、それが時代で、此の鍛冶屋は民家だから、それで世話が、若しこんな意味から時代世話と角書をするのなら、御家騒動と云ふ、先代萩や加賀見山は素より、歎討物の襪褌の錦や箱根靈驗の如きものも、斯くの如き角書をせねばなるまいと思ふ。それを殊に薄雪にのみ用ゐし作者の了簡は如何、敢て之れを地下の作者と大方の識者に問ふ。○全部は上中下の三巻物で、この場は下の巻の中。○作は寛保元年五月。○作者は文耕堂、三好松洛、小川半平、竹田小出雲の四名。○所は大和。○時は秋。○登場人物は端役を除き七名。○年齢は正宗、六十二。○團九郎、廿四五。おれん、十七八。吉助(國俊)、廿二三。左衛門

廿二。薄雪、十六七。右内、三十位。(以下略す)

●時雨の巨燧 紙屋の段に就いて

此の情死は享保五年十月十五日明方。大阪綱島大長寺の墓場に有りし事實を。近松門左衛門の作にて、同年十二月竹本座に於て「心中天ノ綱島」と外題して興行せしが初めに、其の後近松半二と竹田文吉との合作にて、この「天ノ綱島」の内、下の巻(大和屋の場、橋づくしの道行、心中の場)を除き、更の上の巻へ。浮む瀬の詐偽場と、茶屋場の前へ、長町の段を増補して「心中紙屋治兵衛」と外題して興行した。尤も茶屋場と紙治の内は、天ノ綱島の通り、文章も其の儘餽めたれ共、行き方は大違ひ、それを一々比較するもくだくしければ茲には畧す。さてこの「時雨の巨燧」は云ふ迄もない紙屋の段であるが、其の趣

向は「網島」の方でも「紙屋治兵衛」の方でもない。文章も趣向も大同大異である。これが即ち増補時雨の巨燧で、この時雨の巨燧には、綱太夫場と宮戸太夫場との區別があるが、その綱太夫場と云ふは、この紙屋の口「福徳に」からで、宮戸太夫場は、切「門送り」からであらうと思はるゝ、が併しこれは愚按、されど間違ひはなからうと思ふ。尙この本は従來の床本に訂正を加へたる所が澤山ある。○所は大阪○時は冬○登場人物九名○年齢は治兵衛、廿八。小春(事實は藝者)十九。おさん、廿四五。勘太郎、六才。お末、四才。五左衛門、六十前後。太兵衛、廿三四善六、三十前後。二五郎、十八九位。(以下略す)

●繪本太功記二日目 本能寺の段に就いて

この繪本太功記は、繪本太閤記を基礎として仕組みし、歴史的夢幻劇である、されど、夢幻劇としては事實に近く殊に此の本能寺の如きは、原書太閤記に大差無きまで能く似て居る。勿論、原書太閤記は假名書の物なれども、信用すべき價値は有る。○全部は發端を安土城の段として、初段は天正十年六月一日より十三日迄十四段、それで此の本能寺は、六月の二日で、即、二段目である。○此の太功記は、何段目と云はず、何日目と云ふがよし。○春長の信長、阿野の局の於能の局、なるは云ふまでもなし、このぶ蘭丸の艶事などは、狂言の花、事實を問ふべき事でもなからう。○三日太平記(五段目)にも本能寺の段は有る。春永の自殺は同じけれども、趣向には違ひか有る芝居ですれば馬盟の方である。○此の本能寺は京師四條西洞院である。現今の寺町二條の本能寺は、其の後此所へ移轉したものだ。今の本

能寺も地價の騰貴せし故、この寺地を賣却して、又々片田舎へ移轉する由風聞あり、是はさうでもよい事だが○作は寛政十一年七月○作者は近松湖南、近松柳、千葉軒の三名○登場人物は端役を除き八名○年齢は春長、四十九。三法師、五六才。蘭丸、廿二。力丸、十八九。坊丸、十七八。宗祇、五十位。阿野の局、廿三四。しのぶ、十七八。(以下略す)

●繪本太功記 尼ヶ崎の段に就いて

この繪本太功記は。繪本太閤記を基礎として趣向せし。歴史的の夢幻劇なり○作者は、近松湖南、近松柳、千葉軒の三名の合作○寛政十一年七月の作なり○全部の發端を安土城の段として、初段を六月一日とし、それより十三段目、即、六月十三日の小栗栖の竹鎗まで、總て十三日、發端を加へて十四段、それに二日目と十二日目に返り

があつて、此の十日目には夕顔柳、一名、題目と云ふ端場がある○この太功記に限り何段目と云はず、何日目と云ふがよし○名は太功記でも全部十四段の内、光秀を主人公とせしは九段。久吉の方は却て五段より無し○年齢は光秀、五十五。重次郎、十八。さつき、七十三四。操、四十二三。初菊、十六七。久吉、五十ばかり。本文には無き人物なれども、人形や芝居には段切りに、加藤清正を出す事あり、これはグツと若く三十四五と思ふべし○前に光秀の出、後に物見と二度引き道具あり○陣鐘入の遠寄せ三度あり○老女と青年との手負二人あり○所は攝津○時は夏○登場人物端役を除き六名。(以下略す)

●繪本増補玉藻前曦袂 道春館の段に就いて

この玉藻前曦袂は五段物で、寛延四年正月の作で、作者は浪岡橘平

外二名。それを増補したは文化三年五月で作者は梅枝軒、佐藤太の二名、外題には「繪本増補」と角書して尙「三國續、五冊物」との添書が有る。○原本の方ではこの館の段は二段目で、玉藻前は狐ではない唯の人間、道春は道忠で生きて居て、金藤次も殺されはせぬ。ソレをかの坊間の小説本に依つて増補したので、この方では初段が天竺の段。二段目が唐土の段。三段目が日本で、口が清水寺の段で、切が道春館の段である。○玉藻前と云へば天竺、唐土、日本の三國へ害をせし金毛九尾の狐の化物といふ事は小説本の「三國妖婦傳」(丸本にても同名の物あり)又は謠曲の「殺生石」等に依つて誰も知つて居る事なれど。ソレが實際は無根の作り物語で、一ツとして眞面目な事蹟は無い。併九尾の狐の事は「山海經」、「白虎通」、「文選」、等の諸書に見ゆれ

共。それが果して花陽夫人たり、褒似たり、玉藻前たるの證とはならぬ。また日本の古書といふ「下學集」にもかの妖婦傳同様の意味を載せたれ共「こは古老の口碑に依る」とあつて、證文とはすべからず、されはこれは無根の事と云うてもよからう。○所は京都○時は初夏○登場人物は五名○年齢は萩の方、五十前後。桂姫、十七。初花、十六。金藤次、四十位。采女、二十四五。(以下略す)

●日高川入相花王 眞那子莊司館の段に就いて

朱雀帝の朝に、左大臣藤原忠文と云ふ悪人があつて帝位の望む。帝の弟の櫻木親王、小野大臣實頼の娘小田卷姫に通す。忠文得たりとこれを帝に讒言して奥州白河に流す。この親王、後に山伏の姿となり名を安珍と改め、眞那子の莊司の家に来る。これが此の淨瑠璃の眼

目、それに六孫王經基の忠節、伊豫の純友の反逆等を取り合せし例の歴史的の夢幻劇○安珍の事は元享釋書(十九卷)に見ゆ、釋書に載する處、俗傳に近し、されど安珍を京師鞍馬山の僧とし、女を寡婦として少女に非ずと云ふ○きよ姫の事は道成寺縁起及び由来記等に詳しけれども、これ等の書は素より信用すべきものではない。併両書に載する處は、共に眞子の莊子の娘で、十二才の少女である○多岳の「道成寺」には白拍子とあつて、きよ姫の名は見えぬ○道成寺は紀伊國日高郡矢田村字鐘巻に在り○莊子の館は同國南牟婁郡と有つて村名を欠く○時は丸本にては冬、雪が降つて居るが、芝居ですれば櫻の花盛、是れは櫻時にせねは、名題の意味と矛盾する○名題の日高川は所の名、花王は「サクラ」と讀まして、櫻木親王の名をさかせ、道成

寺の鐘に因んで「入相の鐘に花を散りける」の入相を取合せ、日高川入相花王○全部は五段物で、この場は四段目○作は寶曆九年二月(竹本座)○作者は千前軒門人と肩書して竹田小出雲、近松半二、北窓後一、竹本三郎兵衛、二步堂の五名○登場人物は端役を除き六名○年齢は清姫、十六。安珍、廿三四。小田卷姫、十七八。莊司、四十五六。鹿ヶ瀬、廿七八。剛叔僧都、五十位。(以下略す)

●日吉丸稚櫻 駒木山城中の段に就いて

是は例の「繪本太功記」の一節を種として仕組らものなり。此の日吉丸は例の五段物で、五段の外に發端と、發端の前に大序とでも云ふべきものがある、この大序とも云ふべき段に、竹生島の辨才天より觀山の僧昌俊、後還俗して彌助と云ふ者の妻の懷へ、日吉權現を下

し賜ひ、猿面重瞳異相の男子を生ましめ給ふト云ふ一節が有る、ソレデ表題が「日吉丸稚櫻」○作は享和元年十月、作者は近松柳外三名○此の場は三段目の切、駒木(小牧)山の城中である、ソレをどう間違へたか當時は口上にも番組にも「五郎助住居の段」と云ふ。イヤハヤ不詮索千万な事だ、先年阪東簗助が演せし時は、常足の二重で普通の世話物で、所謂鍛冶屋の住居で有つたこの事(僕は見ねども)だからこんな事からして間違へたのでは有るまいか。近頃市川右團治のを見たが、是は立派な駒木山の城中になつて居る。但し芝居の方では勝手次第に手を入れて、此の本文とは大違ひ、肝要のお政のサワリの無いなんぞは恐れ入らざるべからずた○所は尾張○時は初夏○登場人物は七名○年齢は久吉、三十三四。茂助、廿三四。五郎助、六十位。虎

之助、五六才。早太、廿七八。母、四十七八。お政、十九か廿。(以下略す)

●平かな盛衰記 笹引の段に就いて

この盛衰記の大體の譯は逆櫓の段に云うて置いた○この笹引の段は三段目の中で口は道行「君のあと紐」で、切が逆櫓○子供の目敏き夜遊び、偶然の出来事、ソレが取替子となる趣向は、無理の無いよい見出し○この他この場に就いて云ふ事は無い○作は元文四年四月(竹本座)○作者は文耕堂、千前軒、三好松洛、淺田可啓、竹田小出雲の五名の合作○所は近江○時は春○登場人物は端役を除き八名○年齢は鎌田隼人、五十位。山吹御前、三十位。駒若、三才。つち松、三才。お筆、廿一二。權四郎、六十。およし、廿五六。番場忠太、三十五六。(以下略す)

●平かな盛衰記 逆櫓の段に就いて

源平盛衰記は應保年中より壽永年中まで、廿餘年間の事を記せしもの。其中「義仲謀反の事」「梶原逆櫓の事」と有る二題を骨子とし夫を通俗に、通俗と云へば誰れにも分り易き様、ひらがなで書いたと云ふ意味で「ひらがな盛衰記」併、源平盛衰記の方は、全く源平二氏の記事であるが、この平假名の方は、源平と云ふよりは、寧、源々、源々とは木曾と鎌倉との兩源氏の記事だから、源々盛衰記とでも云ふべき歟、其の内容は全部に通じて義仲を主人公とせし場の多ければ、木曾盛衰記とでも云ふが適當ならん。又角書に逆櫓松、矢箆梅と有る、逆櫓松は云ふ迄もなからう、矢箆梅は五段目の大詰に、源太景季の一ノ谷に二度懸せしと云ふに依る。逆櫓と云ふ事、この松右衛門以前には無き事にて、又以後にも傳らざらし事なり、と或る

老船頭は云へり、されどもこの秘術が今もなほありとせば、これをかの婆艦隊に教へ置きたらば、アノ如く、ムザク全滅をせざりしものを。と、露帝は定めて、思召すかどうか。木曾の山の中で育つた樋口を船人とせしはをかしい。ソレばかりでない。義仲の討死はツイ一ト月二タ月前なのに、この樋口の松右衛門は、一年も前から此の家に入聲して、逆櫓の稽古をして居たとは、ユイツも一寸可笑ではないか。全部は五段物、この場は二段目の切。此の本、床の都合で本文に省略せし所多し。全部及この場にも仕組みに少しも無理がない、よい作柄である。梅ヶ枝の手水鉢は聊かケレンに似たれ共、全体は武士道的の作で有る。作者は文耕堂、千前軒(外二名)等の合作。所は攝津、西成郡大阪在。時は五月。登場人物は下役を除き六名。

年齢はお筆、廿二。およし、廿五六。權四郎、六十。松右衛門、三十位。駒若、三才。重忠、四十位。(以下略す)

●平かな盛衰記 神崎の段に就いて

この盛衰記の大體の譯は逆櫓の段に云うて置いた○この場は四段目の中で、口は辻法印の洒落場、切は源太の出陣○千鳥の名は宇治川に因み、梅ヶ枝の名は簞の梅に依る○小夜中山靈鐘記の、無間の鐘の因縁を簞込みしは、ケレンはケレンでも、場面も賑でよい趣向だ○この場の全體は云ふまでも無い假空の事だ○作は元文四年四月(竹本座)○作者は文耕堂、千前軒、三好松洛、淺田可啓、竹田小出雲等五名の合作○所は攝津○時は春○登場人物端役を除き五名、其の年齢は○梅ヶ枝、十七八。お筆、廿二。源太、廿三四。延壽、五十位。(以下略す)

す)

●彦山權現誓助劍 毛谷村の段に就いて

世界は太閤の朝鮮征伐だから角書の「御陣は九州」地理は八道の譯は分明。また外題は、讀んで字の如くだから、解釋には及ぶまい○荒筋は郡音成(毛利元就)の家臣京極内匠(後に微塵彈正)が有りふれし劍術の意恨と戀の意趣に依つて同藩士の吉岡一味齋を暗殺して走る。それを一味齋の妻、娘、孫が敵討に出て艱難する、後許婚の六助に逢ひ、六助の助太刀にて首尾よく本意を遂ぐるに終る。以上豹皮録に載する處に大差なら、併、内匠が光秀の落胤と云ふ事、蛙丸の事、木曾官の事などは例のおらばい○内匠を光秀の落胤とせしのみならず、木曾官の幻術、蛙丸の怪異、千鳥の香爐の奇瑞等を仕組みし

は例の場面の變化、已むを得ざるに出づる、と云へば云へ、如何に
 ナヨン雷時代でも、これは余り馬鹿々々しい○「六助名を貴田孫兵衛
 統治と改め、加藤清正の臣となり、秀吉の命に依り吉岡の女(ふその)
 を妻とす、後征韓の役に戦死す」(帝國人名辭典)と、然に此の貴田孫兵衛
 は毛谷村の六助では無い。國は同じ豊前だが、相撲取の陸助で、力量
 を彦山權現に祈誓して大力を得て、御前角舩に勝利を得。後清正の
 家来となりし者なり、と云ふ。されは、毛谷村の六助は如何「答」コレ
 ヤ例の無根の人物、六助のみならず、此の一件總て無根の物語にて
 貴田孫兵衛を毛谷村の六助ならすとすれば、一ツも見るべき事蹟な
 い」と(松村操言)オヤオヤた○全部は十一段物で、この場は九段目で、
 端場があります○作者は梅野下風と近松得藏○作は天明六年閏十月

(竹本座)○所は豊前(彦山の麓)○時は春○これは一寸別問題だが、故阪
 東秀調がお園の初役の時「故人の型でも氣に入らず、また自ら工風
 の附かぬ、と云ふ振が、人形を見ますると、人形には思ひも付かぬ
 よい振がついて居りまして、一寸見たばかりで、大に發明をした事
 がありました」と云うた事が有つたが、明治三十七年四月、文樂で
 この彦山の通が出た、其の時友平を遣つたのは吉田助太郎とて、ま
 た人に賞らるゝ程の人ではないが、サテよく遣ひました。須磨の段
 の奥(南部)で、お菊の死骸を彌三松に見せまいとの心づかい、また小
 栗栖の切(越路)に「闇こそ幸ひ友平は腹存分に切りあはき」で、糸立
 て身を隠し、お園のサワリの間の切腹。ア、うまいものであつた。成
 程よい手で茲に至つて、秀調の「日」の虚言で無いに感心した。とは

今更に初心らしい事ですが○登場人物は端役を除き五名○年齢六助、三十五六。彌三松、五才。お園、廿四五。お幸、五十位。斧右衛門、四十位。(以下略す)

●姫小松子の日遊 俊寛物語の段に就いて

これは源平盛衰記の一節、僧都俊寛の傳を臺に仕組みし例の歴史的の夢幻劇なり○総て盛衰記を臺とせしものはいづれも清盛を中心として趣向を立つるものなれば、孕常磐でも千本櫻でも兜軍記でも鬼一法眼でも娘景清でも、全體の上からは、皆清盛が主人公になつて居るが、この場即、三段目の切は俊寛の島物語で俊寛が主人公なるは勿論である○名題は初段の文句に「今日青陽の初子の日(中略)引やためしの姫小松」とあるに依る蓋、小松は小松重盛に因んで据ゑたるものだ

(子の日の御遊の故事は略す)○この角書に「常磐御前、熊野御前」とあれど

この人名は解釋には及ぶまい○この島物語は謡曲の「俊寛」(一名鬼界

島)を其の儘に倣めたもの○俊寛は島で落命せしと云ふが事實○鬼界

島は薩摩沖十二島の一ツで一名硫黄島とも云ふ○全部は五段物で初

段が北野の子の日の遊、五段目の大切が牛若丸の奥州出立で目出た

しである○作は寶曆七年二月(竹本座)○作者は千前軒門人と肩書して

吉田冠子、近松景鯉、竹田小出雲、近松半二、三好松洛の五名○所

は山城○時は冬○登場人物は端役を除き八名○年齢は來現の俊寛、

三十六。お安、廿三。小辨の徳壽、八九才。龜王、廿七八。有王、廿四五。

小督局、廿二三。盛久、四十位。盛次、三十三四。(以下略す)

●攝州合邦辻 菴室の段に就いて

この合邦の辻は、謠曲の「羽法師」(合甫に非ず)に依つて構造せし、例の御國騷動の夢幻劇である。其の証據とすべきは、高安及び俊徳丸の名も其の儘のみならず(謠曲通解に曰く。信徳は俊徳とも。通俊は延年とも信吉とも云ふ、と)下の巻の初の、天王寺の西門の場の文は、殆、謠の面影が有るのでも知れる○この「羽法師」の作者は、結城十郎元雅(觀世家)として、長祿三年十月に歿せし人。この合邦の辻の作のなりしは、安永二年二月五日なれば、凡三百年も後に出來たのである○作者は菅專助、若竹笛躬の二人○全部は上下二巻で、上の巻は、住吉の毒酒。高安館僞勅使。俊徳丸國遠。繪旨取戻し。下の巻は、天王寺西門閻魔王建立滑稽勸化。合邦の内井に大詰○全部の趣向は玉手の詞で明瞭である○時は二月○登場人物は端役を除き六名○年齢は玉手、二十。

俊徳丸、十八(能の方では重形にて十三四の心得ださうだ)淺香姫、十六。合邦、六十位。母、五十位。入平、三十五六。女房、廿七八。(以下略す)

●關取千兩幟 猪名川内の段に就いて

江戸の角力に稻川(院本では岩川)治郎吉(三十二三)と云ふ、氣達も面白くよく酒を呑む、技倆力量拔群の力士があつた。ソレが大坂に来て、(明和の初)南堀江の勸進相撲に、鉄ヶ嶽(三十八九)と云ふ大阪力士と立合ふ事になつたが。この鉄ヶ嶽は或る大名の抱へにて、稻川とは素より段の違ふ程の角力なれ共、この勝負に負けたと有つては藏屋敷(抱主の出張所)の面目にも拘はる事として、種々と工風せし上、豫て稻川の借銭の爲に困んで居るを知るもの故、多くの金銭を呉れて、其の急を救ひし上、竊に今度の勝を譲つて呉れる様頼み込んだ。稻川も

一時の恩義に感じ快く承知した。にも拘はらず、サテ土俵へ上つて見れば、四邊の情況は皆、稻川々々として夥しき人氣なるに豫て約束せし事をも打忘れ、素より敵手として不足なる、鉄ヶ嶽を一投に投げつけた。されば鉄ヶ嶽は勿論、内情を知りし藏屋敷連中も大腹立にて、事面倒とならんとするを、江戸の角力の年寄連が聞きこみ。金の爲に江戸力士が、大阪力士に負けたと有つては、江戸力士の名折になる、それを違約とは云へ、幸に勝つて呉れたのは、聊、江戸力士の面目を維持せしもの、如し、され共借りた金を貸さずと有つては、又江戸力士の體面を如何せん、と角力年寄相談の上総代を撰み多くの金を持たせ上方へ登させ、稻川の負債を辨償せしのみならず後日の爲にとて、莫大の費用を惜まず、稻川鉄ヶ嶽の中直りの大宴

會を開きしとなり(江戸より持參せし金は、三百兩で有つたよし、それを千兩持ちて上りしとて千兩のぼりの評判、一時都鄙に喧ひすしかりしに依り、角力に因み、關取千兩轅と名題せしよし)以上事實。これを狂言にして、全部九段。趣向は禮三と云ふ色男に錦木、お才の二婦人が戀着せしを骨子として、それに例のお家の寶劍備前長光の刀の紛失等あり。シテは千羽川といふ關取で、却つて稻川はワキであるが、併この二段目(内の段)は素より稻川がシテで有る。○おとは、十九か廿。北野屋七兵衛、四十ばかり。○は皆作者の筆に生れし人物は勿論である。○この二段目の段切に、相撲場を添へ、櫓太鼓の曲をきかするは、殊に面白き手を附けたものた。○登場人物は端役を除き四名。○所は大阪。○時は秋。○作者は近松半二等の六人。○作は明和四年八月で、即時竹本座の切狂言として興行した

のが初めてで有る。(以下略す)

●菅原傳授手習鑑 佐太村の段に就いて

梅松櫻の三木は菅公の御愛樹。公筑紫にて「東風ふかは匂をおこせ梅の花、主なごとて春なわすれそ」と詠じ給ひしに、都なる紅梅、一夜のうちに筑紫へ飛び行きける。櫻は其の言葉のかゝらざりしことを恨みて、其の夜の中に枯れたりとそ。また源順の歌に「梅は飛び櫻は枯れぬ菅原や、深くを頼む神の誓を」こゝ有るを種ごし、木を人として三人の兄弟を仕組み、梅王を筑紫へ旅行させ、櫻丸には腹を切らせた、ソユで松王の所置に困り「梅は飛び」の歌の上三の五文字より變造して「なにとて松は」と故事附て、小太郎の身代の一段で結末と附けし働き、實にうまいものだ。三人の兄弟が無實の人物

なれば、三人の女房も無根なるは勿論だが、松の女房か千代、梅の女房か春、櫻の女房か八重なんぞは綺麗ではありませぬか○白太夫この人物に就いては古來種々の説(神宮古記、須磨記、世系録、瑞應錄等)があれども、要するに菅家の家臣にて忠實な老人と見ればよい、此の忠實な老人は菅公御一代に能く奉仕せし者なれば、今も菅公の奉祀地には、必末社として、勸請してあるのでも知れる○佐太村。昔は佐多とも沙汰とも書く、今は蹉跎にて、河内國北河内郡で、淀川つき、牧方管區なり、蹉跎天満宮の奉祀地なり○この一段總て無根の事なれとも、舞台面も面白く、理屈も一通り通つて居る、ソレに彼の三別れの一ツなる、櫻丸の腹切と云ふ性念場た○全部は五段物でこの場は三段目の切○菅原に就いての大體の譯は、寺子屋や、松王

屋敷の段にも云うて置いた○作は延享三年八月○作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作○時は春○登場人物端役を除き七名○年齢は白太夫、六十一。松王、梅王、櫻丸、廿七八。千代、廿四五。春、廿三四。八重、十九か廿。(以下略す)

●菅原傳授手習鑑 寺子屋の段に就いて

この手習鑑は、道眞公の御傳記の内の「飛梅の故事」と「梅は飛ひ」の歌(この歌公の自詠でなし)を種として仕組みし例の夢幻劇で。作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作にて。忠臣藏に亞ぐ古今の名作である。殊にこの寺子屋は、出雲の筆に成りしと聞えて彼の菅原の三別れとて、一ツの狂言に親子の別れが三ツ有る。其の一ツで(丞相と刈屋姫、白太夫と櫻丸、松王と小太郎)文章と云ひ趣向と云ひ、

名作たるは勿論である、が○サテ事實は全く架空の例の作り狂言で、この寺子屋へ出る人物で、實有の人は一人もない。イヤ一人は有る、其の一人は若君菅秀才であるが、この菅秀才も實は怪しい者で。道眞公には子女が廿三人有つたと云ふに、其の内に菅秀才と云ふ名前は無い。(其の菅秀才のみ、詮議が厳しかりしと云ふもをかしいがこれが狂言)これも作者が命名親で、作り出せし人物歟。菅は菅原の菅で秀才とは利口發明と云ふ意味から。菅秀才と附けたのであらう。併この命名親は作者は同じ作者でも、この作者では無い。この手習鑑より三十四年前、正徳三年に近松門左衛門の作の「天神記」に菅秀才敦茂(十二才)と云ふ名が有る。(天神記で十二才の者なれば、三十四年後に出来た寺子屋では四十六でよさそうなものか「不憫なやつや九ツ」(松王屋敷では確と九ツと云つて居る)と、松

王が云ふからには、小太郎と同年輩であつたであらう、と思ふと、一寸をかきな感じがする。ナニ一笑ひをつチャないよ、斯う云ふ事を調ふるが、是が學者の天職サ呵々)この敦茂の名は、菅家系譜には五男として載つて居る、また「菅家世系録」には「成人の男子四人は四ヶ國へ、残りは都を免すなり(中略)菅公に多くの公達あり。嫡高視、土佐。二男景行、佐渡。三男景茂、讃岐。四男敦茂」と有り。さればこの敦茂を菅秀才、と申せしかと云ふに謙讓美德ある道真公が、巳の悴に秀才と云ふ自惚らしき號を許されしとは思はれねば、矢張りこの名前は近松が命名親らしい。イヤ秀才とは其の頃、學に入りし者の総稱にて、今云ふ生徒と云ふ様なものだと云ふ、サレはこの七八ツの若君の上に、また澤山の公達が有つて、いづれも就學して居るものとすれば、皆菅秀才と云はねばなら

ぬではないか。序だから云ふて置くが、この天神記には白太夫(春彦)の娘に小松と小梅と云ふ二人の姉妹が有る。其の二人の夫として、時平の家來で若竹と云ふ者が有る、この三人は白太夫の子と婿でソレで松竹梅である。かの三ツ子の兄弟は是から換骨せしにあらざるや、と思はるゝ節もある。ガソレは格別、菅秀才は道真公の若君として(名前は兎も角)あつたかも知れねど、他は一人も無い人である。サレば年齢の如きも、菅秀才、小太郎は、八九才。よだれぐり、十五才、の外他は一ツも據る處が無いが。前後の文勢情況に依つて推定するに。源藏、四十五六。戸浪、四十位。松王、三十三。お千代、廿七八。玄蕃、三十七。八。百性共はよい加減。○所は山城。○時は春。○芹生里、愛宕郡の東端にして京の三條より二三里北西、北嵯峨は芹生より二三里西南、鳥

部野は東山ではなからう、仇野には非ざるか可考○この狂言は延享三年八月竹本座で興行したが始めにて大當りせしと云ふ○全部は例の五段物で、初段は大内。加茂堤。傳授○二段目。詞の甘替(道行)。安井の濱。道明寺八聲の鶏○三段目。車曳。賀○四段目。飛梅。北嵯峨。寺子屋○五段目。雷。菅秀才復任贈位○松王屋敷は後人の作所謂蛇足、あらずもがなた。併、好う書いて有る。云ふ迄もない、この場は小嵯峨と寺子屋の間なり○登場人物は端役を除き七名。(以下略す)

●菅原傳授手習鑑松王屋敷の段に就いて

この松王の屋敷の段は、寺子屋(菅四)の裏面を發露せしものにて、其の趣向の寺子屋に依りしは勿論である○この松王屋敷も、これ一段

の物とすれば、なかくうまう出来て居るが、これを寺子屋の前へ出すとなると、此の段の爲に、寺子屋が一向つまらぬ物になる、其の譯は、松王を時平方と思へばこそ、賀の趣向も面白く、首實檢にも見物の身が這入る。また「今まで敵と思ひし松王」と、源藏が不審なする尤もなれども、この松王の屋敷が見せて有るこ、見物は疾に松王の烝相方を知つて居るから、源藏は目先の見えぬ、馬鹿者の様に見える、尙この外、この松王の屋敷を聞いてから、寺子屋を聞くど、間の拔た事や、理屈に合ぬ事が出来て、折角の寺子屋の趣向がメチャクになる。嚮に本藏下屋敷の段でも云うて置いたが、故人の趣向の底を割つて、故人の作意を疵つくるは、甚よくない事である。若し本藏の下屋敷や、此の松王の屋敷を書く筆が有つたら、故人

の作意を盗ま^ず、當り物の名を借らず、獨立獨歩の新作をしたらよ
 からう。當時流行する「壺阪」の如き、作の上から云へば、この松王
 や本藏より、幾段も云ふ程劣る物なれども、敢て他の趣向を害せね
 ば、當り物の名も借らぬ、立派な新作(或人の曰く「この壺阪は□□の焼直
 して、人名地名か違ふ丈で、文章も節附も、殆ど其の儘だから妙た」と云はれたが、其の
 □□とは耳なれぬ名題であつたのと、此の話は、酒宴の雑談であつたので、ツイ其の
 □□を、忘れて仕舞つた。或人其の後何所に居るか住所か分らぬので、今は証據立て
 ば出来ぬが、いつれ其の後取調べて御目に懸けやう)で、マア近頃の當り物と云
 つてもよい。併これは問題外○菅原全部に就いての事は「賀」と「寺
 子屋」に云うて置いたから御覽なさい○菅原の通へ加ふれば、この場
 は四段目の口に當る○作及作者未詳○所は山城○時は春○登場人物

は端役を除き五名○年齢は松王、三十三。千代、廿七八。小太郎、九ツ。
 立番、三十七八。御臺所、四十位。(以下略す)

淨曲 語り物 の 譯 (坤之卷) 畢